

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院学生研究**  
**2020年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	史学	専攻		
<b>研究代表者</b> (2021年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号			氏名			
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 (学生番号: 19PC001B )			王尊龍 印			
<b>指導教員</b>	所属部局・職			氏名			
	文学部・教授			上田信 印			
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	琉球王国時代の漢詩と外交：東アジア交流史の視点から						
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏名			
	文学研究科・史学専攻・博士課程後期課程・2年			王尊龍			
<b>研究期間</b>	2020 年度						
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円						

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

「漢詩」とよばれる中国の古典詩は、春秋時代の『詩経』から唐代に定着した近体詩まで、一貫して外交や政治的交渉の手段として重要な役割を果たしていた。こうした政治的な属性が包摂されている詩という文学形式は、七世紀に「東アジア文化圏」の拡大に伴い、漢文と共に東アジア共通の外交言語として周辺地域に受け入れられ、漢学教養という知の普遍主義の代表的具現となったのである。

本研究では、琉球王国における漢詩の受容とその外交的役割に焦点を当て、現存する琉球漢詩を網羅的に考察し、その文学的な特徴を明らかにした上で、17世紀以降における琉球の対中・対日外交に主眼を置き、漢詩のやりとりはいつ、誰より、どのような形で行われたのかを検討し、琉球を主体とした外交の一側面を描写することを目的とする。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 琉球王国 ] [ 漢詩 ] [ 東アジア ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、以下三つの課題を検討することを目的として計画された。

- (1) 琉球王国における漢詩受容の実態
- (2) 近世期における琉球士族の漢詩学習の全体像
- (3) 近世琉球の外交活動における漢詩の役割

(1) 琉球王国における漢詩の受容は、日本から渡来した僧侶や日本に留学した琉球僧によって伝えられた「山門の漢学」および、久米村に移住した中国系移民が伝えた「久米村の漢学」という二つの学統の下で発展を遂げていた。しかし、従来の研究では、琉球漢詩という日中両国の渡海者がもたらした外来文化の受容を論じる際に、日本と中国を含む東アジアの地域的な政治、文化環境に触れずに琉球内部の要因だけに求める傾向がある。そして、日本禅林と深く関わっていた琉球僧と中国系の渡来人である久米村人のそれぞれの作詩は、古琉球から近世琉球期にかけて同時並行的に展開されたのか、この二学統は時代によってどの程度に琉球王国の文教事業に浸透したのか、などの問題については必ずしも明確化されていない。これらの問題を解明すべく、研究代表者は昨年度において、15世紀から日中両国で起きていた文学思潮および、それが琉球に与えた影響を分析し、さらに近世以降における琉球漢詩の発展をもたらした政治的、社会的要素に対して多角的な分析を行い、古琉球から近世期にかけての琉球王国における漢詩受容の実態を通時的に考察した。今年度では、昨年度に投稿した論文に新史料を追加した上で、加筆・修正を行った。その成果は、『アジアの海を渡る人々：一六・一七世紀の渡海者』（春風社、2021年）における一章として出版された。

また、琉球王国の漢詩受容史をより広い文脈に位置付け、同時代における人間・情報・学知のグローバルな流れの中で理解するため、研究代表者は、16・17世紀の東西文化交流に関する論著をひろく渉猟し、その上で2篇の学術論文を翻訳した。その成果は、2021年度に『海洋史研究』と『史苑』の収録論文として公表する予定である。

(2) 琉球王国時代の教育に関する諸研究において、漢詩学習は官生や勤学人の修学内容の一項目として言及されるものの、漢詩学習に特化した研究は、管見の限りまだ見当たらない。そこで本研究では、「官生」と呼ばれる中国に派遣する国費留学生と関係する史料に加え、「楚南家文書」（法政大学沖縄文化研究所蔵）という資料群の中から、漢詩の学習に関わる内容を網羅的に抽出し、初歩的なデータベースを作成した。しかし、Covid-19パンデミックの影響により、今年度はオンラインで公開されている史料に依拠して研究を行わざるを得なかった。こうした状

**研究成果の概要** (つづき)

況を受け、より詳細な分析は来年度以降に実施することとした。

- (3) 日本と中国に派遣される琉球の外交使節たちは、現地で開催される儀式や宴会に出席した際、どのように漢詩の献上、唱和を通じて両国との関係を円滑に進めたかを考察した。具体的な事例として、清代中期から定例化された「使節献詩」という正月行事に焦点を当てた。この事例について、本年度では、昨年度の研究成果をさらに発展させ、「大清会典」、「軍機処隨手登記档」、「日省録」などの史料を用いて、清代における「使臣献詩」制度の成立・展開過程の検討に取り組んだ。その上で、「使臣献詩」の展開を手がかりとして、清を中心とする支配構造、およびそこから派生する外交構造が、いかなる形で運営されていたかを、政策執行の細部にわたって分析した。その成果は、2021 年度に開催される「明清史夏合宿」にて発表する予定である。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

## ① 雑誌論文

[翻訳論文] (計 2 件)

- (1) Manel Ollé/王尊龍・李曉璐 (訳)「菲律賓群島の華人：一個地方性社群的全球投影」『海洋史研究』第 18 輯、2021 年内刊行予定、ページ数未定。  
原著：Ollé, Manel. 2019. “The Chinese in the Philippine Archipelago: Global Projection of a Local Community.” In *Early Global Interconnectivity across the Indian Ocean World, Volume I: Commercial Structures and Exchanges*, edited by Angela Schottenhammer, pp. 314-342.
- (2) 李曉璐/王尊龍 (訳)「宮内庁蔵「万国絵図屏風」人物図考」『史苑』第 82 巻第 1 号、2021 年内刊行予定 (投稿済み)

## ② 図書

[分担執筆] (計 1 件)

王尊龍「第 13 章 琉球王国における漢詩の受容と展開」上田信・中島楽章編『アジアの海を渡る人々：一六・一七世紀の渡海者』、春風社、2021 年、449～478 頁。

## ③ シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし

## ④ その他

[書評] (計 1 件)

王尊龍「岩井茂樹著『朝貢・海禁・互市：近世東アジアの貿易と秩序』」『史苑』第 81 巻第 2 号、2021 年、113～123 頁。

[学会発表予定] (計 1 件)

「清代における「使臣献詩」：琉球貢使の作品と代筆を中心に」(2021 年度明清史夏合宿、応募済)